

旅 の こ と ば



鴻上尚史

こうかみ・しょうじ

作家・演出家。1958年、愛媛県生まれ。早稲田大学法学部卒業。1981年、劇団「第三舞台」を結成。「スナフキンの手紙」(94)で岸田國士戯曲賞を受賞。現在は、「KOKAMI@network」、若手俳優を集めて旗揚げした「虚構の劇団」での作・演出を中心に活動。海外公演としては、2007年「TRANCE」、2011年「Halcyon Days」。いずれもイギリス人キャストへの演出を行っている。桐朋学園芸術短期大学特別招聘教授。

Diarrheaについて

イギリスの演劇学校に留学している時、それはそれは英語に苦しめられた。その辺りの喜劇的悲劇は『ロンドン・デイズ』(小学館文庫)として出ていると、冒頭、いきなり宣伝になってもうしわけないのだが、本当に英語には苦しめられた。

授業の内容を理解するために、僕はクラスメイトのレイチェルに個人的な家庭教師を頼んだ。一週間に一回、授業で分からなかった内容を確認する時間を作ったのだ。

演技のレッスンの時に、「ダイアリア」という単語を男子生徒が口にした。僕はそれを音だけで覚えていたので、レイチェルの個人授業の時に質問した。レイチェルは身振り手振りで僕に説明した。どうやら「お腹を壊すこと」だと分かった。自分で何度も英語辞書を引いたのだが、「ダイアリア」にはたどり着けなかったのだ。

個人授業を続けながら、二人は地下鉄に乗っていた。

僕は「スペルは？」と聞いた。

その瞬間、レイチェルは「オー！ ノー！」と叫んで頭を抱えた。そして、目の前に座っているビジネスマンに「ダイアリアってどう書くんでしょう？」といきなり質問した。もちろん、見も知らぬ他人である。聞かれたインテリの匂いがするスーツ姿の中年ビジネスマンは、小さく笑いながら「diarrhea」と説明した。

こんなスペル、音を聞いても自分では絶対にたどり着かないと唸^{うな}った。同時に、イギリスの名門演劇学校に入学するレイチェルでさえ、スペルには自信がないんだ、そういうものなんだと唸った。日本人が「憂鬱」とか「林檎」なんて字は読めるけれど書けないことと対応するんじゃないかと思った。だとしたら、平均的なイギリス人が書けないスペルを習得することに時間をかけるより、もっと有効な英語の勉強があるだろうと考え直した。

ちなみに、「diarrhea」は「下痢」だ。